

感覚モダリティと社会的要因が音韻システムにもたらす影響：

手話言語がもたらす知見

ダイアン・ブレンタリ

シカゴ大学

手話の研究は言語の仕組みに関する独自の道筋を提供する。本日は2つの研究を紹介する。1つ目は手話の言語間研究、2つ目は新興の手話の研究である。これらの研究から、コミュニティ内におけるコミュニケーションモダリティと社会的交流を考察しなければ、言語の音韻記号体系（抽象的な符号）は理解できないことが分かる。まず、コミュニケーションモダリティについては、手話と音声言語のそれぞれで関与する生理学的構造が異なることにより、言語体系の成り立ちに違いが生じる可能性がある。たとえば、手話においては音声言語よりも同時的形態が多く使われているという主張がしばしば提起されている。こうした主張はまさにこれらの生理学的理由から、ある程度当てはまると考えられるが、私たちは、言語の外在化に関係する認知負荷によって1つの言語が処理可能な同時性が制限されるのかを考察する。形態の同時表現の限界とバリエーションを米国手話、英国手話、香港手話、イタリア手話における動作主を表す複数形態に関する言語間研究の結果を用いて論証する。

本日検討する2つ目の要因は、広い意味での社会的交流である。その規模と社会的交流の慣習が異なる2つの若い手話において、音素体系がどのようにして生まれるのかを示す。ここで言う音素体系とは手型のことであり、2つの手話とは中央トラス手話（CTSL）とニカラグア手話（NSL）である。比較的小規模で孤立した、多数の聴者使用者を含むろう者コミュニティ（すなわち、村落手話、CTSL）に属する場合と、比較的大規模で多様なろう者から成る、聴者使用者が少ないコミュニティ（すなわち、コミュニティ手話、NSL）に属する場合で、手型の一覧の音韻論的発生に違いが生じるのかを考察する。一覧全体に見られる特徴と特定の音韻素性のグループについて、上にあげた2言語間の比較および「コホート」（両コミュニティ内の、接触の在り方が異なる下位集団）間の比較を通じた分析を加える。

これらの研究のそれぞれで、手話観察の結果とそれに相当する音声言語の研究結果を比較する。これら2つのバリエーションと発生を含む手話の分析により手話に関する重要な事実を明らかにできるのみならず、音声および社会的状況における言語の本質に関する言語学全体の長い間の問題について新たな知見が得られることが明らかとなった。